エッセー

自然が育む力

雪のあたたかさ

古里と結び付いた体験と言葉

但馬にも本格的な雪が降り始めましたね。空を見上げながら静かに降る雪を眺めていると、私はとても心が和みます。厳しい冬の到来を嫌う人もいることでしょう。しかし雪国で生まれ育った私にとって、雪が降ることは当たり前であり、厳しいことも楽しいこともたくさん連想することができ、古里の大切な景観の一つとして身に染み付いています。

よく都市部の方から「雪が降ると寒くて大変ですね」と言われますが、私はいつも「雪が降った方があたたかいと感じるものですよ」と答えていました。

先日東京での出来事です。仕事の関係で初対面だった20代の女性と雑談していたとき、冬の季節の話になりました。その方が「雪が降るとあたたかいんですよね～」と何げなく話すのです。私は本当にドキッとしました。同じ感覚を持っている人が東京にいるんだ。しかも20代の若い人で。と驚いてよく話を聞くと、やはり島根の雪深い山間部出身の方でした。このときあらためて実感したのです。人は雪の印象を「寒いかあたたかいか」という正反対の言葉に変えている背景には、その人の今まで生きてきた経験、特に楽しかった子どものころの体験が、古里という掛け替えのない、心の中のあたたかさと一体になってこそ創り出されている言葉なのだと。

雪遊びに熱中する子どもたち

雪が降ると子どもたちは外で遊びたがります。雪は滑っても丸めても、自由にできる遊び道具が目の前にあるのですから、子どもにとっての最高のおもちゃ箱。でも大人からしてみると、風邪をひいたら大変とか、雪の野山は危険だと感じてしまいます。

危険は自分自身が察知して体感として身に付くものなので、子どもたち自身が気づくよう促したり、遊んだ後の身体的フォローをすることだけを心掛け、できる限り遊びをバックアップしてきましょう。

但馬だからこそ「雪があたたかい」と感じる大人になってほしいと思います。

（尼崎市立美方高原自然の家所長　田中誉人）